

2016年3月に行ったこのインタビューでは、美術家である藤浩志が十和田市現代美術館館長という立場を得た際にどのような場を作り社会に開いたのか、そこで人々の居場所や関わり方をどのように作ったのかに焦点を当てるとともに、そこから見ている未来像についても尋ねた。

木村：藤さんは、美術家であると同時に十和田市現代美術館の館長でもあります¹⁾。今回はその立場から美術館と地域、まちなかの関係の理想像をどう考えていらっしゃるのかをお伺いします。あわせて藤さん自身についての現在とこれからについてのお考えもお尋ねします。まず、十和田では館長として、地域との関係づくりについてどのような取り組みをされていますか？

藤：ずっとシステムづくりを模索している状態で、この3年間で少しずつ変化しつつあります。最近の事例としては2015年の4月より十和田市現代美術館パートナーズ(TAPS)という新しいサポーターのフレームができました。これはミュージアム友の会の発展形で、教育普及的なアウトリーチ活動に特化した予算を確保するために組んだものです。以前は美術館の事業費として教育普及の予算は少しだけあったのですが、アウトリーチの予算が組まれていませんでした。ですから作家のプロジェクトの一端として展覧会費の中から予算を割いてアウトリーチを行っていたり、僕が個人的な関係で学校の先生から頼まれて作品作りの技術指導をしたり、「NHK高校講座」という番組の企画で高校に行き、地元の高校の美術部の学生に授業をしたりして何か機会があるごとに地元との関係を作ろうとしていました。

しかし、TAPSのおかげでバスを手配して、小学校にプログラムを持っていったり、逆に小学生を美術館に呼んだり、継続的なアウトリーチの活動もできるようになったと思います。

木村：藤さんが入ることで、スタッフと地域の方やスタッフ間での向きあい方が変わるような部

分はありましたか？

藤：僕が現場に入るまでは管理運営は十和田市が直営で行っていました。ですから市役所の職員が館長として赴任し、その補佐や経理担当など市役所から出向して来ていました。専門職として学芸員が一人と広報兼テクニカルスタッフが一人常勤で、あと非常勤職員が一人という小さなところでした。受付・監視などは外部の人材派遣に依頼して行っていたようです。しかし、美術館を計画した当初からN&A(NANJO and ASSOCIATES)という東京の会社がコンサルタントとして関わっていて、そこが常設作品などもディレクションし、開館後も年に2つの企画展についてはそこが常設作品の作家を中心として展覧会を構成していました。美術館の開館当初はまちの人が美術館の活動のサポートを行う団体を作ってまちなかのプロジェクトを行ったりしていたようですが、僕が赴任した時にはその団体の活動がほとんどなくなっていました。美術館で何かを仕掛けるということではなく、市民の任意団体がまちでの活動をしかけるストーリーを作りいろいろ動いていたのですが、その活動の中心にいた人が活動を離れたたり紆余曲折あり、市としては次の展開を作りたいと思っていて、そのあたりを指定管理として入った僕らに期待していたところもあります。

十和田市現代美術館そのものが中心市街地の活性化を目指して作られた経緯もありますが、中心市街地、特に徒歩5分のところにある商店街との関係をどのように作っていくのかは美術館としても課題で、いろいろ模索してきました。韓国の作家、チェ・ジェンファの個展の時にかなりガッツリ商店街を展示会場としたことがきっかけとなり、それなりにまちの人の期待はありました。僕らが赴任する時に、市が置き土産的に緊急雇用の費用を使って一年間限定で美術館にまちへの案内を行うコンシェルジュを募集することになっていました。美術館の最初の仕事はその採用面接を行うことだった

ことを覚えています。コンシェルジュ2名と美術館の受付監視スタッフ2名の雇用は美術館のまちでの役割をいろいろ変えていく上でとても重要だったと思います。

木村：コンシェルジュは委託スタッフですか？役割についても教えてください。

藤：当初は緊急雇用の1年限定の直接雇用でしたが、結局それから3年経った現在でもN&Aの直接雇用の契約スタッフとして活動してもらっています。美術館の作品案内とかではなく、まちなかとか周辺施設への観光対応のコンシェルジュなんです。当時「交通が不便だからどう行けばいいか」とか「この周辺で食事できるところはないか」という問い合にわせに対して情報が整備されてなくて、受付やスタッフなどまちを知らない人が対応しなければなりません。もともと役場の人が美術館スタッフだったので、まちのことは知っているという自負があり積極的に知ろうとする活動はしなくても良かったのかもしれませんが。面接で初めて出会い、そのまま採用した二人のスタッフですが、一人が以前居酒屋の店長をしていた経歴で、人と接することやまちのレストランやお店にもかなり興味を注いでくれる人材でした。もう一人がもとバスガイドや旅行代理店に勤務していて、旅行の行程表をつくることにかかなりのエネルギーを注ぐことができる人材でしたので、その後のコンシェルジュの方向性はこの二人によって決まりました。

当時、十和田のまちのレストランなどを紹介している地図として、開館当時に観光協会が美術館と協力して作ったものがあったのですが、まちのお店はかなり移動が激しい。つまり、お店がなくなっていたり、新しいお店ができたりして地図が古い。使えないのです。これは僕のなかでの常識ですが、まちの人に対して、美術館に興味をもってもらおうと思ったら、まず、美術館がまちの様々な人に興味を持つことが大切だと思っています。まちを知ることを美術

藤 浩志へのインタビュー

美術館と地域について：美術家として、館長としての視点から

(2016年3月5日)

聞き手：木村 健

館がはじめないと、まちの人と一緒に何ができるかわからない。そこで、初年度用意されていたコンシェルジュ予算で美術館周辺のまちなかのおもしろい情報とレストラン、カフェ、ショップ情報をリサーチして「とわだじかん」というマップが組み込まれた十和田を楽しむニュースレターのようなものを2013年3月から年2回を目指して発行し始めました。冬の企画で「びじゅつの学校」といういろいろな部活動を募集して展示会を構成する地域向けのプログラムを企画し、そのなかで彼らにマチネタ部という部活を立ち上げてもらい、今もSNSやブログで公開したり、そこでの取材に基づいて「とわだじかん」を編集したりしています。3年目には奥入瀬溪流とか十和田湖までエリアを広げました。

この「とわだじかん」を作るようになって、美術館での問い合わせが徐々に減りました。最初の2年間はコンシェルジュのカウンターをカフェにして案内をしていたのですが、美術館のサイトと「とわだじかん」に交通情報も載せて、インフォメーションの人たちが交通案内もできるようにしていったら、コンシェルジュが窓口に必要ななくなってきました。

それとコンシェルジュが作っていったのがツアーです。当初はまちなかを巡るお散歩ツアーのようなものを企画していましたが、十和田奥入瀬芸術祭をきっかけとしてまずは奥入瀬、十和田湖までアーティストと行くツアーのようなものを企画するようになりました。まちなかツアーにしても、当初はコンシェルジュが美術館のサポーターと一緒に行っていましたが、そのうちサポーターを中心に行うようになりました。で、コンシェルジュは旅行代理店とツアー企画を組むようになったり、八戸の観光協会と協力してバスツアーを企画したり、じわーっと彼らの得意分野で動くようになりました。

木村：その「じわーっと」という感覚は、藤さんが嗅ぎ分けて「こっちな？」と作っていくのですか？ 藤さんはスタッフと話をする時間をどのように持つのか教えてください。

藤：日常一緒にいるなかでの自然の会話で「こういうものを作たらどうだろう」となることがあります。実は会議は嫌いですが3年間ほとんど会議をしたことがありません。現場では上手な無駄話がとても重要だと思っていて、無駄話を重ねるうちになんとなく共通のベクトルが見えてきます。うちの場合、机が8つしかないんですよ。

経理も、学芸もコンシェルジュも。職員は8人以上いるので、空いてるところに座るのね。一応おおまかに席は決まっているけど、決まっていない人もいて。僕は2年間は席が決まっていたけど、非常勤になった3年目からは空いているところに座っていました。会議は今は月一でやっているけれど、最初の2年間はほとんどしてなくて。普段はみんなが一緒に会ってことがほとんどないので、そのためにシフトも変えました。うちは9時オープンの17時閉館で、朝は8時半から夕方17時から18時まででないといけなくて、微妙に全員のシフトがずれていたのを、まとめたんです。それで休みの時間を増やした。8時半から17時半までで、残業をなるべくしないようにして。月曜は基本的に休館だからミーティングやメンテナンスをしています。

木村：コンシェルジュは他に何をしていますか？

藤：基本的には外部からの様々な問い合わせへの対応と来場者に対する全般的な案内です。同時にFacebookとかTwitterの投稿、ブログの更新などもやりながら、「とわだじかん」のネタ探しや編集作業、まちなかツアー、バスツアーなどのプランづくりなどもやっています。特に十和田奥入瀬プロジェクトが始まってから十和田湖や奥入瀬のエリアに活動領域が広がり、アーティストと一緒に奥入瀬に入るオリジナルツアーを企画していた時期はかなり大変だったと思います。今はまた新しく写真のプロジェクトをやり始めていますね。まちなかで撮った写真にハッシュタグをつけて、FacebookやTwitterにあげてもらい、飯沢耕太郎さんをゲストに迎えて賞をつけて、受賞作品をまちなかの店舗のショーウィンドウに飾っていくプロジェクトです。

木村：それは藤さんのアイデアですか？

藤：それはチーフ・キュレーターの見島やよいさん²のアイデアです。

木村：それではもうひとつ、こうして現在までをご自身で作ってこられて、その先のことについても伺います。館長として、また美術家として、十和田市現代美術館をこの先どのようにしていきたいとお考えですか？

藤：美術館の活動を面白く、魅力的にしてい

く、面白い美術活動を作る若い作家が十和田に興味を持ち、地域と深い関係を持たなければならぬと思っています。面白い作家が登場しないと美術館は面白くなりませんから。それと同じように今の感覚を企画にできるキュレーターやコーディネーターが地域の中に育たなければなりません。赴任して最初の年に講師として東北芸術工科大学の宮島達男さんや、地元の写真家やネイチャーガイドの方をお招きしつつ、若いアーティストを全国募集して、奥入瀬にある廃墟のホテルや遊休地などをめぐり様々な企画会議を行う合宿形式のアーティストキャンプを企画しました。そのときから星野リゾート奥入瀬溪流ホテルは全面的に協力してくれました。次の年にもまたアーティストキャンプをしてキュレーターとアーティストを育てようとしたときに、これって美術大学みたいだなと気付いたんです。

美術館は教育普及の延長で、作家にせよ、キュレーターにせよ、鑑賞者にせよ、とにかく人を育てていかないと面白くなりません。その発想から展示会として「びじゅつの学校」という企画を行ったり、去年と一昨年で当時AIT（特定非営利活動法人 アーツインシアティヴトウキョウ）にいらした小澤慶介さんを十和田にお招きして、キュレーター講座をやりつつ展示会をつくる企画を行ったりしました。

実はうちの美術館にはキュレーターが少ないのです。決まった額の管理費で多くのスタッフを雇えないし、国内外の展示会などリサーチしたり研究したりする時間も予算もない。悲しい現実です。それを埋めるために、展示会予算でゲストキュレーターをお呼びして展示会を作るスタイルができたのだと思います。「十和田奥入瀬芸術祭」では当時国際芸術センター青森・ACACの服部浩之さんと、AITの小澤さんに頼みました。その時から小澤さんとの縁が始まっています。

よく考えてみると青森には美大はないし、岩手、宮城、福島にもない。山形には東北芸術工科大学があるのですが、公立の美術大学となると東北、北海道地域にはありませんでした。そんな中でようやく2年前に秋田県に秋田公立美術大学ができて、今はそこと連携した活動に興味を持っています。一方で地域とまちづくりと芸術祭とアートプロジェクトなど、いろいろ俯瞰したときにやっぱり強いのは金沢、愛知、京都、もちろん東京も。美大があるってすごい強いし、

京都と金沢は地域の産業と結びついている。これは圧倒的です。「あいちトリエンナーレ」が成功しているのも、愛知には美大があるしね。

木村：なぜ美大があると強いかというと、キュレーションをする側にも作家の側にも周囲にその卵の人たちがいて、美大で教える側にもいろんな人がいるということでしょうか。

藤：あとは日常的にサポーターがいるし、アートに関心を持つ人が多いからですね。一緒に作っていただける人がいる。まちなかに美術と関わってきた経験を持つ人が蓄積されているということだと思います。一緒に作っていただける人がいないと面白くないですね。それと何かが始まる予感のようなもの、出来上がったものを持ってきて楽しむのではなく、何かエネルギーが集まってきてそこから何かゴウゴウと発生する状況には、完成された人ではなく、未完成で意味不明の、柔らかい感性のなんでもない人が触媒となる必要があると思うんです。美大にはそんな人が多いのかな。

僕には学校化する美術館というイメージがありました。学校といっても僕の学校には授業がないし先生もいないんです。いろいろな部活動があり、部室のような状況がある空間です。実は十和田市現代美術館は冬の期間、来場者がぐっと減るんです。そういうときに観光客が来ないのなら、せめて地元の人たちに美術館を使ってもらおうと思って、部活動に注目しました。部活動はやらされているというよりも、自分たちがやりたいからやっているじゃないですか。会費を払ってまで、それが重要です。

十和田市現代美術館で最初に部活動を作ったのは奈良美智さんの展覧会の時です。美術館の企画展示ではもちろん美術館の展示室での展覧会も行うのですが、まちなかの空き店舗などでの展示もやっています。奈良さんの場合はセキュリティの問題からまちなかに作品を置くわけにいかないし、弘前でも数年前にまじゅうで相当いろんなことを行っていたので、そういうことをやってもなあ、と。それでスクール事業みたいなことをやりたいという話が出てきたので、部活の話は僕がして、奈良美智が部長の美術部ができました。で、「奈良美智が美術館で美術部を作るぞ、やる気のある部員よ、来

い！」と部員を募集したら全国から150人の応募があり、書類審査で6人に絞って、「青い森の小さな美術部」ができました。これが今も活動していて、僕は一応顧問です。この時にまちなかで空き店舗などを活用して展覧会をしましたね。

そのあと「びじゅつの学校」という企画展で、もっといろんな部活を募集しようということでエントリーシートを用意して3名以上いれば部活として申請できるというのをやりました。藤森八十郎さんという架空の学長が認めれば、部員として部活として認められて美術館の中に部室がもらえるという設定にしたのです。展示したい人もいればワークショップをやりたい人もいて、それで30ぐらいの部活ができて、自主的にいろいろな活動が始まりました。「途中でやめる」というブランドを作っている山下陽光さんが部長の被服部という部活とか、下道基行さんが部長の観察部、山本修路さんが部長の樹木部、戊井昭人さんが部長のものごと部、このあたりはゲストですが、ゲストの活動に刺激を受けていろいろな特技や思考を持った人が部活を作り出し、美術館の活動の周辺で自主的に活動を展開しました。

木村：普段、心のなかであたためていることを出し合って、一緒に景色を作る、ということですね。

藤：そうそう。十和田奥入瀬芸術祭の時にこの第二弾の部活をやろうと思ったんだけど、美術館の中にスペースを用意できなかったのです。するとシューンと活動が縮小してしまいました。やはり部室の魅力が大きかったのだと思います。自分の活動が展示されているコーナーであれば人は集まってくるし、誰か自分の興味関心を共有できる人がいるかもしれないという期待感が人を集めるけれど、その拠点を作れなかったのです。

木村：活動の香りがほんのり残っていると、部室の性格があると人が来るのですね。いつのまにか残っているものが貯まっていつか、しみ出てくるものがそこにあったりとか。

藤：そうですね。そういうものがないと自分たちの場として感じられないですね。「びじゅつの学校」はそんなコーナーを少しでも作っていったんです。そういう場があると「ここだ」という認識があるから、ちょこちょこ関わったり、



1



2



3

1 十和田市現代美術館「超訳びじゅつの学校」での部活動「Umajin部」の様子(2013年)

The situation of the club activity, *Umajin-bu* in the Super Liberal Art School, Towada Art Center, 2013.

2 十和田市現代美術館「超訳びじゅつの学校」での部活動「花かざり部」の様子(2013年)

The situation of the club activity, *Hanazakari-bu* in the Super Liberal Art School, Towada Art Center, 2013.

3 「水と土の芸術祭」での部活動「手部」の様子(2012年)

The situation of the club activity, *Te-bu* in the Water and Land Niigata Art Festival, 2012.

画像提供：藤 浩志

Courtesy: FUJII Hiroshi

*1 藤は十和田市現代美術館館長に2014年4月に就任し、インタビュー後の2016年3月末に退任した。

*2 児島やよい氏は2016年4月より十和田市現代美術館副館長に就任。

やろうかという意識になる。

木村：公共の場所だと、そうしたことはなかなか残しにくいことかもしれませんね。

藤：部活を作る活動は長野県茅野市の美術館でやったり、新潟や北九州、前橋でもやったのですが、今いろいろとすごいことになっているのが新潟の「手部」です。商店街の空き店舗にアートセンター的な空間があったのですが、そこを手部の部室として解放したら、そこからいろいろな活動が発生して面白いことになっています。それは新潟が場所をちゃんと作れたってことだと思うのです。

木村：「手部」の主体は市ですか？

藤：場を提供しているのは新潟市ですが、手部はまったく任意の集まり。立ち上げのきっかけは新潟市の事業だけど、その主体は市民です。その部室は商店街の中で、市が借り上げて商店街の活性化のために開放している場所だったのですが、手部の部室として商店街が提供しているようです。そこに集まってくる人がじわじわと増えて、そこから活動がまたじわじわと展開して。実は要は部長の人柄だったりするのですよね。手部も日常の仕事が終わったら必ず部室を開けにくる部長の女性が一生懸命で、いい味を出している。

十和田では大友良英さんが部長の音楽部も作りました。そして奈良さんの美術部とで、六本木アートナイトに対抗して三本木ナイトというイベントができて盆踊りをしました。実は捉え方によっては美術館が仕込んだイベントとそれを作るためのワークショップなのですね。それを「部活です」といい、部員を募集して、地元出身のミュージシャン桜田マコトさんに副部長になってもらって、その人が仕切って練習するのだけれど、本当にいろんな人が集まって練習を重ねて、まるで部活動。それに奈良さん部長、中崎透副部長の美術部が盆踊りの飾りつけを作っていくのを、みんな本当に一生懸命に楽しそうに行うんです。妙な言い方になりますが、部員たちは仕込みも片付けも自分でやるのが当たり前だと思っている。美術館が主体となってイベントやワークショップとしてこれをやっちゃうと、参加者もゲストもお客様みたいな気分になって取り組んでくれるんだけど、そこが

部活の力というか、自覚が違うんですね。部費として会費を払うのと参加費を美術館に払うのと、気分が違うじゃないですか。

このときは期間限定でしたが、美術館の一部を美術部の部室、音楽部の部室という感じで開放しました。そこにもうちょっと溜まり込めるような、部室的なしつらえができればよかったのですが、イベント重視みたいなかたちになったのは反省点です。ただ期間限定っていうのもありだなとは思いました。部活は最初に市民に対して広く告知していますし、つねに部員を募集しているので公平性も担保されています。それでいながら外からの見え方も変わりますし、何と言っても参加者のモチベーションが全然違ってくるのはおもしろいですね。

木村：部活だと部長もいれば、会計みたいな人が内側にいますよね。それを美術館がやるのではなく、お金の管理も自分たちで行うのですか？

藤：そこまでじゃないね。部活の体をした、美術館のワークショップというか。

木村：外に開く部分では、例えばチラシは部員たちで作りましたか？

藤：それも美術館が仕込みましたね。いま美術部に関しても完全に独立して自分たちで活動して、北海道や秋田で展示したり、奈良さんもたまに来たりとか。十和田の美術館を離れていて、それはそれで面白いと思います。

木村：離れるまでは2年間かかりましたか？

藤：2年間です。まちなかにいくつか拠点を作っていきこうとしていて、そこをどういうふうネットワークしていこうかというのは今やっているけど、まだちゃんとできてないところはあります。唯一それらを繋いでいるのはマップとツアーですね。

木村：それは藤さんではなく、コンシェルジュが繋いでいるのですか。

藤：そうですね。今、十和田ではないのですが、福島県いわき市のいわき芸術文化交流館(いわきアリオス)で面白いことを仕掛け始めています。いわきってすごい広域なんです。いろいろ

と多様な性格を持った地域が、昭和の大合併のときに合併していわき市となったところ。もちろん震災や放射能汚染で大変な地域もあるのですが、基本的に市内の中心部は、復興のために人が入って空き家がないぐらい変化しつつあるところ。その文化施設の職員が自分の興味関心を核にしてリサーチを行い、地域の様々な文化の種を探しつつ、部活動のようなものを作り出す「スキマチイワキ」という新しいタイプのアウトリーチの活動を行っています。ローカル線好きがローカル線の駅舎をリサーチしてみたり、各地のお雑煮をリサーチしてみたり、和菓子、発酵物、^{あざな}字名、こけし、ローカルバスなど、地域の様々な心惹かれる要素に興味と関心を注ぐリサーチ活動です。

十和田のコンシェルジュの発想もそうだったのですが、地域の人に施設の活動に対して興味を持ってもらう以前に、まず施設側が地域の人たちの様々な活動に興味関心を持ち、対話を始めるところからでないとなんだか面白くない。地域には様々な魅力的な活動が、あるいは表現の種が潜伏しているのです。それをコンシェルジュや施設の職員など、施設で働いている人たちが主体となって積極的に掘り起こそうとする態度が地域に対していい刺激になって、結果として施設の活動に繋がっていくのだと思っています。

藤 浩志(ふじ・ひろし)

美術家。1960年生まれ。京都市立芸術大学在学中演劇活動に没頭した後、地域社会を舞台とした表現活動を志向し京都情報社を設立。同大学院修了後、青年海外協力隊員としてバブアニューギニア国立芸術学校勤務。都市計画事務所勤務を経て1992年に藤浩志企画制作室を設立。各地で地域資源・適正技術・協力関係による対話と社会実験を活用した表現活動を志向する。NPO法人プラスアーツ副理事長(2016年-)、十和田市現代美術館館長(2014-16年)、秋田公立美術大学教授(2014年-)。

木村 健(きむら・たけし)

金沢21世紀美術館 エデュケーター。1972年生まれ。岡山大学大学院修士課程修了(美術史)。1997年開館の子供向け体験型博物館施設「キッズプラザ大阪」でサイエンスとアートの要素を組み合わせたワークショップを企画するとともに、神戸市のNPO「C.A.P.」に参加するなど地域交流型のアート活動に関わる。2000年より金沢市現代美術館建設事務局に勤務、金沢21世紀美術館開館後は教育普及プログラム担当としてキッズスタジオを中心とした子供を対象とする活動、学校連携活動等に携わる。

インタビューを終えて 藤浩志の現在を通して見る、金沢21世紀美術館とまちの未来像

木村 健

美術家としての藤浩志が表現活動のために「藤浩志企画制作室」を設立したのは1992年のことである。これについて彼から以前、藤浩志企画制作室とは「藤浩志」を企画し制作するものだ」と説明を受けたことがある。その後も現在まで彼はまさに美術家・藤浩志を社会に活かし、地域社会を舞台に協力関係や適正技術を見極めて新たなイメージを導き出す。すなわち、社会の中に新しいOS（オペレーティング・システム）を生み出すという表現を探求してきたといえよう。時には「藤浩志」以外に新たな役割を担う登場人物として、彫刻家・楠文や架空の学校長・藤森八十郎などを生み出しつつ、常にコミュニティの中での個々の人格とその場の役割とが活かし合うような場作りを続けている。

藤はOS作りという表現の中で、時に個人の生活での細かなシーンに着目し、それらが日々の積み重ねのなかで無意識に生み出している巨大なものを可視化するような提案を実践してきた。例えば、1997年に家族のプロジェクトとしてはじめた「家庭内ごみゼロエミッション」で藤は家庭生活から排出されるごみの全てをコレクションしたが、それは家族や町内のような小さなコミュニティの中で動きはじめながら、やがて都市や国も超える大きなネットワークとして広がっていった。集積した膨大な樹脂製品は展覧会「Vinyl Plastics Collection」（1999年、箱根の森美術館）で再生し、そのサイクルは地域活動のためのOS「Vinyl Plastics Connection」（1999-2003年）へと発展するのだが、現在では日本各地を始め海外でも行われている「かえっこバザール」もこの「Vinyl Plastics Connection」の活動上で生まれたもので、その原型は当時、小学1年生と保育園児だった2人の藤の娘たちによる発案である。ここでも子どもたち同士のコミュニケーションやグループ内の役割作りの仕組みが集合し、地域のより大きなコミュニティに

も活きるシステムが生まれている。

さて、藤がそのように「地域のシステム」に立脚した活動を広げると時期を同じくして開館の準備を進めていた金沢21世紀美術館では、プレ・イベントの段階から藤に着目している。2002年3月には児童館を会場に、子供が自主的に参加する場を作る美術館像を示すものとして「かえっこバザール」プロジェクトを行った。（会場：金沢市立城北児童館）^{*1}。ここではまず活動のコアになる子どもたちと大人のメンバーを募集して事前にアイデアを持ち寄ってショップやゲームの仕組みを作り、当日は多くの子どもたちを迎えて共に楽しんだ。以降も当館では、折にふれ「かえっこバザール」を実施し、現在は各地の「かえっこ」のプロセスで集積したおもちゃから成る作品《Happy Paradies（ハッピーパラダイズ）》を、藤の社会との関係性を示す重要な作品として収蔵している。そして今あらためて金沢21世紀美術館の今後について地域における機能をどのように示していくかを考えるにあたり、藤浩志の活動と地域社会の関係の捉え方をアップデートしておくことは重要であると考えた。

また、2016年にこのインタビューを行った背景には、当館で2014年度より始まったグループ活動「まるびい みらいカフェ」の存在がある。これは美術館での「ワクワク・ドキドキ」を実現するためにメンバーが自主企画・自主活動を行うもので、会全体でのミーティングと話題ごとの小グループの集まりを織り交ぜ、館内案内のほかにも造形や短歌のプログラム、まちなかの路地探検を行うなど、美術館に集う人々がより楽しめる活動を目指している。これらの活動とともに美術館とまちのこれからの関係を考えるためにも藤浩志の最新の活動に着目したのがこのインタビューであり、招聘の際には当館主催の「2015年度ボランティア交流会」（2016年3月5日）でも藤のトークを行い部活動の様子などを紹介して

もらった^{*2}。

今回の藤の話の中で特に興味深い点は、部活動的な居場所の在り方と施設側の地域への働きかけ方であり、集う部員にやることへの強いモチベーションがあって部活が成り立っていることだ。同時に施設側にも地域への興味関心を持ち働きかけることの重要性を感じた。同様に、コンシェルジュと来場者の関係においても、自分自身のモチベーションと互いへの関心が鍵といえるだろう。今回のインタビューでも、自主的な活動のなかで社会的な繋がりが生まれる場面では、どれくらい施設側のスタッフが働きかけるか、どんなツールを提案するか、そこには常に藤の観察・提案と集う人々の試行錯誤があった。すなわち、施設の機能が一方的に人を待ち受ける箱であるだけでは、やはりそこから生まれる人の動きや広がりにも限界があるようだ。美術館とまちの人との関係においても、互いが互いに惹かれ、刺激を与え合うとともに変化すること、そしてそこから新しいものが生まれることを導けるよう務めていきたい。

*1 詳細は以下を参照。『2001年度 金沢21世紀美術館（仮称）活動記録集』（2002年、金沢21世紀美術館建設事務局）。また、その後金沢の市民グループ「金沢エコライフくらぶ」を中心に「かえっこバザール」が継続的に市内で開催されている。

*2 トークの内容は「みらいカフェだより Vol.2」（2017年3月発行）に抄録。

KIMURA (K): You are an artist and the director of Towada Art Center.¹¹ This time, I'd like to ask you, in your capacity, what you think about your image of an ideal relationship between museums, regions, and towns. Also let me ask you about your ideas of your present and future. As the director of the Center, how are you working to strengthen your relationship with the community?

FUJI (F): I've been all this while exploring the issue of making systems, and there have been gradual changes over the last three years. For example, we have provided a framework for new supporters called TAPS since April 2015. It was developed from *Tomo-no-kai* (supporters' association), and was organized to ensure budget for activities specialized in educational promotion outreach programs. Previously, we had a little budget for educational promotion as part of the operation cost of the museum, but there was no budget for outreach program. Therefore, outreach programs were conducted using a section of the exhibition budget as part of artists' projects. I also gave technical guidance for making artworks at the request of a school teacher whom I had personal links with, or I gave lessons to students of the art club at a local high school as part of the "NHK High School Course" TV program. I took advantage of every opportunity to foster a good relationship with the local community.

Thanks to TAPS, we have also been able to do sustainable outreach activities, such

as providing a bus to bring the program to elementary schools or, conversely, they were invited to the museum.

K: Do you think that your presence had an impact on the relationship between the staff and local people or among staff members?

F: Before I started to work, the Center was under the direct management of Towada City. So, a city official was appointed as the director, and his assistants and accounting personnel were temporarily transferred to the museum. As for professional staff, a curator and a public relations/technical staff were working full-time with part-time staff. It was such a small office. I heard that a staffing agency was asked to provide personnel for reception and security guard. At the beginning when the museum was in the planning stage, however, Tokyo-based Nanjo and Associates were involved as the consultant. They directed the museum's permanent collection, and after the opening, they organized an exhibition twice a year centering on the artists of the permanent collection. At the opening of the museum, I heard that local people formed an organization to support the museum activities and conducted projects in town, but when I arrived, their activities were rare. It was not that the museum set about doing something, but it acted to have citizens' voluntary organization start up activities in town. However, the key person left the organization and twists and turns followed. The city wanted to develop the next step and

expected us to work as the designated administrators.

Towada Art Center was realized in the first place to vitalize the central area of the city, and for the museum, how to build a good relationship with the central urban area—the shopping center in particular—located a five-minute walk from the museum had been a challenge. I heard that different things had been tried. For Korean artist CHOI Jeong Hwa's solo exhibition, the shopping area was used as a major exhibition site, and since then, local people had considerable expectations for the museum. When we started our new posts, the city was recruiting, using the cost of emergency employment and for one year only, concierges for the museum who would show people around the town. It was like a parting gift from the city. I remember that my first job at the museum was to interview those applicants. I think that the employment of two concierges and two staff of receptionist and security guard was very important in changing the role of the museum in the town.

K: Are concierges contract staff? Please tell me about their roles.

F: At the beginning, they were employed directly by the museum for one year only for emergency staffing needs, but even now after three years, they are still working as contract staff directly employed by Nanjo and Associates. They do not act as guides of the museum, but are tourism-oriented concierges

Interview with FUJI Hiroshi On Museum and Locality: From Artist's and Director's Viewpoint March 5, 2016

Interviewer KIMURA Takeshi

taking people around the town and to the surrounding facilities. At that time, information was not fully prepared for inquiries such as “The transportation is inconvenient. How can I get to the museum?” and “Is there any place to eat around here?” The receptionists and the staffs who did not know the town well had to deal with them. At first, some city officials were working for the museum, and as they were confident that they knew the town very well, it was probably not necessary to make positive efforts to know the town. I met with both of the present concierges for the first time at the interview, and one of them used to be a bar master, and he was very much interested in meeting people as well as restaurants and shops in town. The other used to be a bus guide and work for a travel agency, so she could put a lot of energy in planning tourist itineraries. The course of action of our concierges was set by these two people.

At the time of the museum opening, Towada Tourist Association made a map of Towada introducing its restaurants, etc. in cooperation with the museum, but shops change very quickly. In other words, some shops were gone after a while, replaced by new ones, and the map went out of date. It was simply not usable. According to my own common sense, if the museum expects local people to find it interesting, the museum should get interested in all kinds of local people first. Without getting to know them, it would be difficult to know what the museum could do with the local people. With the concierge budget for the first year, we started to publish a newsletter to enjoy Towada, incorporating a map ‘*Towada Jikan* (hours)’ which covered researched information on interesting topics around the museum as well as restaurants, cafés and shops, from March 2013, aiming for publication twice a year. For a regional program in winter, we planned to organize exhibitions of various school club activities entitled ‘*Bijutsu no Gakko* (art school).’ We asked the participating students to start a club called *machi-neta* (town news)

club. Even now they post information on SNS and a blog, while we edit *Towada Jikan* based on the information they collected. In its third year, we expanded the area to cover Oirase Keiryu mountain stream and Lake Towada.

After we started *Towada Jikan*, the number of inquiries to the museum gradually decreased. For the first two years, the concierge counter was made into a café to provide information, but as traffic information was offered on the museum homepage and *Towada Jikan*, and the staff at the information counter became able to provide traffic guidance, concierges were no longer needed at the information counter.

What concierges introduced was a tour program. First, a strolling tour around the town was planned, but Towada Oirase Art Festival led us to plan a tour-with-artists to Oirase and Lake Towada. As for the town tour, a concierge used to go with museum supporters, but later supporters became responsible for the tour. So concierges started to implement tours with travel agencies or planned bus tours in cooperation with Hachinohe Tourist Association, and they could gradually work in the field of their expertise.

K: Do you foresee that kind of gradual shift and make a project? How do you spare time to talk with your staff?

F: While we work together every day, we sometimes come up with a new plan in a natural course of conversation, and say, “Why don’t we make such-and- such?” To be honest, I don’t like meetings and there was hardly any meeting in three years. I think that idle chatter is important at the work place, and after repeated idle talks, a common vector becomes visible. At the museum, we have only eight desks shared by accountants, curators and concierges. There are more than eight staffs, so we sit down at whichever desk that is available. Roughly the seats are fixed, but some people do not have fixed seats. For the first two years, my seat

was fixed, but in the third year when I became part-time, I took a seat that happened to be available. Now we have a meeting once a month, but we had hardly any meeting in the first two years. Usually it is rare that all of us meet together, so we had to change our work shifts. The museum opens at 9 in the morning and closes at 5 in the evening. Thus we had to be at the office from 8:30 in the morning to 5 or 6 in the evening, and the shift of everyone was slightly misallocated. Now they are aligned. We could increase time off that way. We work from 8:30 to 17:30, and try not to work overtime as much as possible. The museum is closed on Mondays as a rule, so we have a meeting or perform maintenance then.

K: What else do concierges do?

F: Basically they respond to various external inquiries and provide overall guidance to museum visitors. At the same time, they post messages on Facebook and Twitter, update a blog while looking for and editing news items for *Towada Jikan*, and plan town tours and bus tours. Especially after Towada Oirase Project began, our activities spread to the areas around Lake Towada and Oirase, so we were pretty busy when we were planning original tours into Oirase with artists. Now we have started a new project of photography. We ask people to take photographs in town and put hashtags to post them on Facebook and Twitter. Our guest judge IIZAWA Kotaro makes the decision in awarding prizes and we showcase the prizewinners in the windows of shops around the town.

K: Is that your idea?

F: It is our chief curator KOJIMA Yayoi’s idea.¹²

K: I have another question. You have organized it until now, and let me ask you about the future. As the director and as an artist, how do you think Towada Art Center should be in the future?

F: In order to make museum activities interesting and attractive, young artists who enjoy interesting artistic activities should get interested in Towada and have a deep relationship with the region. Museums won't be interesting without interesting artists. Also, curators and coordinators who can organize a project with a fine sensibility for the present should be nurtured in the region. In my first year as the director, I invited MIYAJIMA Tatsuo of Tohoku University of Art and Design as well as local photographers and nature guides as lecturers and recruited young artists around Japan to participate in our arts camp to have various planning meetings while visiting hotel ruins and unused places in Oirase. From that time, Hoshino Resorts Oirase Keiryu Hotel has been fully cooperating with us. In the following year when I tried to have an arts camp again to train curators and artists, I noticed that it was like an art college.

A museum is considered to be an extension of educational promotion. In any case, we need to nurture personnel whether it were artists, curators, or viewers to make museums interesting. Based on that idea, we implemented *Bijutsu no Gakko* as an exhibition, and invited last year and the year before last OZAWA Keisuke, who was working for Arts Initiative Tokyo at the time, to Towada to organize an exhibition while giving lectures to curators.

Actually the number of curators is limited at our museum. It is difficult to hire enough staff with a fixed budget for management fee, and there is neither time nor money to research on exhibitions at home and abroad. It is a sad reality. To cope with it, we came up with our style of organizing an exhibition with a guest curator. For Towada Oirase Art Festival, we invited HATTORI Hiroyuki, curator of Aomori Contemporary Art Centre at the time, and Ozawa of AIT. Ozawa and we have kept in touch ever since.

On reflection, there is no art university in Aomori, Iwate, Miyagi and Fukushima. There is Tohoku University of Art and Design in Yamagata, but there was no public art university in Tohoku and Hokkaido. At last,

Akita University of Art was founded in Akita Prefecture two years ago, and now I'm interested in working with that university. By the way, looking at regions, towns, art festivals and projects from a bird's-eye view, I find Kanazawa, Aichi, Kyoto and of course, Tokyo most outstanding after all. Having an art university is crucial, and Kyoto and Kanazawa are tied to local industries. It is overwhelming. Aichi Triennale is a success, and there is an art university in Aichi.

K: Do you think that the strong point of having an art university is that there are budding young people around curators, artists as well as instructors at the art university?

F: Also there are supporters on a daily basis, and there are many people who are interested in art. There are people they can work with to produce works. People who have the necessary experience in art are accumulated in those cities. It's not fun if there aren't people who can make things together. In a situation in which there is a feeling that something is beginning to happen, something energetic and enthusiastic is developing, it means, not just bringing in readymade items to enjoy. A person who is not perfect and inexperienced, incomprehensible with youthful sensitivity should work as a catalyst. Probably there are a lot of such people at art universities.

I had an image of a museum, which is like a school. It is a school with no class and no teacher. There are various club activities and clubrooms where such activities can be performed. Actually, visitors to Towada Art Center are much fewer in winter. During such a period when tourists are not coming, I wanted local people to use the museum. That's why I got interested in club activities. They are doing club activities because they want to do it, rather than being made to do. They even pay for it. That is important.

I organized club activities for the first time at Towada Art Center at the time of NARA Yoshitomo's exhibition. As the museum exhibition, artworks are of course shown

in the museum galleries, but we also display some works in vacant shops in town. In case of Nara, we could not put his artworks in town for security reasons, and several years before, Nara was doing a lot of things all around Hirosaki, so I didn't feel like doing similar events in town. Then we came up with an idea of a school project, and I talked about club activities. Thus we formed an art club with Nara Yoshitomo as a manager. We advertised, "Nara Yoshitomo is the manager of the art club at the museum. If you are interested, you are welcome!" and we had 150 applicants from around Japan. We selected six candidates by document screening to form the "Little Art Club in the Blue Woods." They are still working and I'm the advisor for the present. We held an exhibition using vacant shops in town then.

Later, in our exhibition *Bijutsu no Gakko*, we tried to recruit members for new clubs. We prepared entry sheets and invited people to apply for a new club if there are at least three members in the club. According to our arrangements, FUJIMORI Hachijuro, a fictional character as the president, was created, and if he approved of the club and members, they were provided with a clubroom in the museum. Some people wanted to exhibit their works while others wanted to hold workshops. About thirty clubs sprang up, and they started their activities on their own initiative. YAMASHITA Hikaru who has his brand named *Tochu de Yameru* (stop halfway) was the manager of Clothing Club. SHITAMICHI Motoyuki managed Observation Club, YAMAMOTO Shuji was the manager of Trees Club, and INUI Akito was the manager of Story Club. They were all guests, and inspired by the guests' activities, people with special skills or thoughts organized clubs and expanded their activities on their own.

K: I see. They talk about ideas which they have been thinking over, and make a landscape together, don't they?

F: Right. We wanted to launch the second

version of the club activities at the time of Towada Oirase Art Festival, but we could not provide enough club space in the museum. Then their activities shrank all of a sudden. I believe that having a clubroom was an attractive factor. When there is a corner displaying their works, people will come to see them, and there might be someone they can share their interests with. Such expectation gathers people, but we could not make a base for that.

K: When there is a slight scent of activity or the air of a club, people will come...when things left behind have been accumulated or something is oozing out.

F: Yes. Without them, they can't feel that it is their place. In *Bijutsu no Gakko*, we tried to create such a corner even in some small way. When there is such a place, they feel, "This is the place..." and become motivated to get involved or do something.

K: In a public space, it would be difficult to provide such a place.

F: I was involved in organizing club activities at museums in Chino City, Nagano Prefecture as well as in Niigata, Kita-kyushu, and Maebashi. Now *Te-bu* (lit. hand club) in Niigata is performing sensational activities. There was a space like an art center in a vacant shop in the shopping area, and after it was opened to the public as a clubroom of *Tebu*, various interesting activities occurred. It means that Niigata was able to provide such a place.

K: Is it run by the city?

F: Niigata City provides the place, but *Tebu* is a totally arbitrary group of people. The plan was initiated by Niigata City, but citizens form the core of activities. The city leased a room in the shopping area and made it available to the public, but now the shopping area seems to provide it as the *Tebu* clubroom. People gathering there increased gradually and their

activities became more active. The pivotal part of such development depends upon the club manager's personality. As for *Tebu*, the manager tries as hard as she can. She always comes to open the clubroom when the everyday work is over. She is giving a nice performance as the manager.

At Towada, we formed Music Club with OTOMO Yoshihide as the manager. In cooperation with Nara's Art Club, they organized an event called 'Sanbongi Night' against Roppongi Art Night, and implemented Bon festival dance. Looking at it from another perspective, it is an event initiated by the museum and a workshop to realize that event. We call it a "club activity" and recruited members. SAKURADA Makoto, a musician from Towada, became the sub-manager, and he directed their training. Many people gathered for the training, and that was exactly a club activity. The Art Club led by manager Nara and sub-manager NAKAZAKI Toru made decoration for the Bon festival dance, and everyone enjoyed doing the work as hard as they could. It might sound strange, but the club members believed it was naturally their job to do all the preparation and cleanup. When the museum initiates an event or a workshop, participants and guests are in the mood that they are all guests. But the power of club activities or their awareness is different. There is a different feeling between paying a club fee for club activities and paying an admission fee for museums.

Then a part of the museum was used as the Art Club room and another for the Music Club room, and so forth, for a limited time. I wish we could have made the space more clubroom-like where people could hang around, but I regret that it was more event-oriented. I thought that a limited time could be acceptable. The citizens were widely informed of the club activities at the beginning, and members are recruited constantly. So, fairness is guaranteed. How the museum is viewed from outside changes, and most of all, the participants' motivation is apt to change completely, which is interesting.

K: In the school club activities, there are the manager and someone who takes care of accounting. Do they manage accounting on their own instead of the museum?

F: No, not to that extent. Despite the outward appearance of club activities, it is a kind of workshop of the museum.

K: In terms of giving out the information, did the members make flyers, for example, by themselves?

F: That was also taken care of by the museum. Now the Art Club is completely independent and operating on their own. They hold exhibitions in Hokkaido and Akita, and Nara visits them occasionally. They are separated from the museum in Towada, and I think it's interesting that way.

K: Did it take them two years to leave the museum?

F: Two years. They are trying to have some bases in town and build network, but haven't succeeded yet. The only thing that connects them is map and tour.

K: It is not you, but concierges who connect them, isn't it?

F: Right. Now something interesting is beginning, not at Towada but at Iwaki Performing Arts Center (Alios). Iwaki is a vast area. Regions having diverse characteristics were merged as Iwaki City at the time of the great mergers of the Showa period. Some part is still having a hard time because of the Great Earthquake and radioactive contamination, but basically the central part of the city has changed a great deal, crowded with people coming in for reconstruction so as to make it difficult to rent a house. The staff of cultural facilities there carried out research on what interested them as the core, looking for various cultural materials in the area to pro-

mote activities like clubs. It is a new type of outreach activity and they call it *Suki Machi Iwaki* (lit. love town Iwaki). A staff who likes local trains researches on stations along local railways, and others research on *zouni* (Japanese soup with *mochi* rice cakes for New Year's Day), Japanese confectionery, fermented food, *azana* (nicknames), *kokeshi* dolls, local buses, etc. They are research activities to explore various attractive things in the local area.

The idea of concierges in Towada was the same. Before making local people get interested in facility activities, the facility staff should get interested in various activities of the local people and start dialogues. Otherwise, it is not interesting. In local area, different attractive activities and materials for expressions are concealed. The attitude of people working for institutions, like concierges or staff, to use their initiative to dig up such hidden materials is a good stimulus for the area and eventually it is connected to the activities of the institution.

(translated by NISHIZAWA Miki)

*1 Fuji Hiroshi was appointed the director of Towada Art Center in April 2014 and stepped down at the end of March 2016 after the interview.

*2 Kojima Yayoi was appointed the deputy director of Towada Art Center in April 2016.

FUJI Hiroshi

Artist. Born in 1960. After having devoted himself to theater activities as a student of Kyoto City University of Arts, Fuji established Kyoto Joho-sha to pursue his expressive activities set in the local community. After completing his graduate studies at the same university, he became a JICA volunteer and taught at the National Art School in Papua New Guinea. He established Fuji Hiroshi Planning & Production Office in 1992 after working for a city planning office. He pursued his creative activities using social experiments and dialogues based on local resources, appropriate technologies and cooperative relationships in many parts of Japan. He has been a professor of Akita University of Art since 2014, and Vice Chairman of NPO Plus Arts since 2016, and was the director of Towada Art Center from 2014 to 2016.

KIMURA Takeshi

Educator of 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa. Born in 1972. Completed his graduate studies at Okayama University Graduate School with MA in art history. He planned workshops combining scientific and artistic elements for Kids Plaza Osaka, which is a "hands-on" museum for kids opened in 1997. While working at Kids Plaza Osaka, he participated in NPO 'C.A.P.' in Kobe and got involved in art activities promoting regional interactive art. In 2000, he began to work for the construction project office of 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa. After the opening of the museum, he has been in charge of the educational promotion programs and involved in activities targeting children centering around Kids Studio and school collaborative activities.

In this interview held in March 2016, I asked artist Fuji Hiroshi about what kind of place he, as the then director of Towada Art Center, tried to provide for the public and how he could encourage their involvement. Focusing on these subjects, I also asked about his view to the future.

Fuji Hiroshi as an artist established 'Fuji Hiroshi Planning & Production Office' for his expressive activities in 1992. He once told me that the objective of Fuji Hiroshi Planning & Production Office was to plan and produce 'Fuji Hiroshi.' Up until now, he has leveraged the maximum potential of artist Fuji Hiroshi in society, and derived new images while identifying cooperative relationships and appropriate technologies based on local communities. In other words, one might say that he has been exploring expressions, which create innovative OS (operating system) in the society. He sometimes created characters to play new roles besides 'Fuji Hiroshi,' such as sculptor Kusu Takeshi and fictitious principal Fujimori Hachijuro, and continues to provide places to match individual personalities to their roles in the community.

In creating OS, Fuji sometimes paid attention to detailed scenes in personal life, and actually made proposals to visualize something great that is generated unconsciously in daily accumulation. For example, in 'Zero Emission of Household Waste' project, which he started as family project in 1997, he collected all the garbage discarded. It started in a small community such as household and town, and spread as a big

network exceeding cities and countries. A huge amount of collected plastic products was recycled in Vinyl Plastics Collection exhibition (The Hakone Open-air Museum, 1999), and that cycle developed into the OS for regional activities, Vinyl Plastics Connection (1999–2003). Kaekko Bazaar (exchange bazaar) which is conducted all over Japan and even overseas at present was born from the activities of this Vinyl Plastics Connection, and its prototype was the idea suggested by Fuji's two daughters, a first grader and a preschool child. Here again, mechanisms of fostering communication among children and creating roles in a group were put together and generated a system viable in a larger community in the region.

In light of the mission "to create a community museum based on citizens' participation," we at 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa introduced Fuji's such activities from the museum's preparatory stage prior to the museum opening in 2004. The first event was Kaekko Bazaar project, which took place at Kanazawa City Johoku Children's Center in 2002.¹¹ First, children and adult members were recruited to form the core of activities, and they brought ideas beforehand to make a system for shops and games. On the day of the event, many children came and enjoyed themselves together. Since then, whenever possible, the museum has held Kaekko Bazaar, and now the collection Happy Paradies, which consists of toys accumulated in the process of kaekko (exchange) held in various places,

is regarded as an important work showing Fuji's relationship with the society. Now in considering how to perform our functions of 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa in the community for the future, we believe that it is important to update our knowledge to understand the relationship between Fuji's activities and the community.

By the way, what should be considered in the context of this interview held in 2016, is our group activity 'Marubi Mirai Café,' which started in 2014. With the keywords 'wakuwaku dokidoki (exciting and thrilling),' the members of the group voluntarily plan and perform activities at the museum to produce programs that visitors will enjoy far better. Therefore, while they have meetings of the whole group and meetings of a small group to discuss each topic, they provide programs for producing artworks, composing tanka poems, exploring small streets in town, etc. besides showing visitors around the museum. In order to review these activities as well as think about future relationships between the museum and the community, this interview with Fuji Hiroshi focused on his latest activities. When we invited Fuji to the museum, we asked him to talk about the club activities at our 'Volunteer Exchange Meeting 2015' on March 5, 2016.¹²

What was most interesting in Fuji's talk was how the place for club activities could be provided, how the museum appealed to local people for participation, and how the club members were strongly motivated to keep performing their activities. I realized the

After the Interview

Future Image of 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa and the Community Viewed through Present-day FUJI Hiroshi

KIMURA Takeshi

importance of the museum's involvement in the local community. Similarly, regarding the relationship between concierges and visitors, their motivation and interest in each other hold the key. As told in the interview, when social ties were born in their voluntary activities, there were always Fuji's observations and suggestions as well as the process of trial and error of people involved in terms of how positively the museum staff should approach the community and what kind of tools could be suggested. In other words, as long as the institution unilaterally remains a container awaiting people to come, there is a limit to people's movements and extensions. In the relationship between the museum and local people, I would like to take initiative in creating such an environment where people are attracted, stimulated and inspired by each other for the creation of new activities.

(translated by NISHIZAWA Miki)

*1 For details, please refer to *Activity Report of 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa in 2001* (Kanazawa: Construction Office of 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa, 2002). Since then, *Kaekko Bazaar* has been continuously held mainly by 'Kanazawa Eco Life Club,' a citizens' group in Kanazawa.

*2 The content of his talk is summarized in *Mirai Café Dayori*, vol. 2 (March 2017).